三　岡崎高等師範学校の誕生と終戦

岡崎高等師範学校正面
（都築亨氏所蔵）

◆岡崎高師設置の閣議決定

岡崎市会が、一九四四（昭和一九）年一〇月に二つの緊急議案を可決したのち、岡崎高師の設置が実現するかどうかは政府の判断を待つしかありませんでした。当時、戦時体制下にあって、大蔵省は新規の要求を一切認めない方針を打ち出しており、しかも次年度予算の編成を目前に控えた時期での要求となるため、文部省・大蔵省との折衝は非常に困難を極めたものであったと思われます。この点に関して、先にも取り上げた七里公章「創立を回顧して」では、次のように記されています。

……新規事業は一切認可出来ない当時の情勢であるから、これが実現にはめまぐるしい政治的折衝が初った。政府が国会に予算案を提出するまでには、何程の時日も残されていない。わずかの期間に文部省議を経て大蔵省に折衝せねばならぬ。この間の消息は相当混雑した紆余曲折を物語るものがある……

（七里公章「創立を回顧して」『岡崎高等師範学校誌』）

その後、一九四五年二月に「岡崎市に高等師範学校を設立すべき建議案」が帝国議会に提出・可決され、同年三月一九日には、岡崎市・愛知県など関係者の努力が実って、ようやく岡崎高等師範学校の設置が閣議にかけられることになりました。国立公文書館には、その閣議に提出されたと考えられる次のような「岡崎高等師範学校設置要項」が保管されています。

岡崎高等師範学校設置要項

一、昭和二十年度ニ於テ岡崎高等師範学校ヲ左ニ依リ設置スルコト

1、学科ハ理科ノミヲ置クコト

2、当分ノ内代用附属学校ヲ置クコト

3、校地、校舎ハ既設ノ設備ヲ利用スルコト

4、教授用設備ハ昭和二十年度ヨリ昭和二十三年度ニ至ル四ヶ年間ニ整備スルコト

二、岡崎高等師範学校ノ編成ハ左ノ如クスルコト

学科	学級数					生徒数					備考
	一年	二年	三年	四年	計	一年	二年	三年	四年	計	
第一部（数学）	一	一	一	一	一	三五	三五	三五	三五	一四〇	
第二部（物象）	二	二	二	二	二	七〇	七〇	七〇	七〇	二八〇	
第三部（生物）	一	一	一	一	一	三五	三五	三五	三五	一四〇	
計	四	四	四	四	一六	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	五六〇	

三、岡崎高等師範学校生徒ニハ年額三〇〇円ノ学資ヲ支給スルコト

その閣議では、この設置要項に基づく岡崎高等師範学校の設置が決定されました。そして、同月二八日には「高等師範学校官制中改正」（勅令一三一号）が公布され、岡崎高等師範学校は広島高等女子師範学校とともに、翌四月一日に創設されることになりました。岡崎高師の開校直後のようすについては、七里が次のように回顧しています。

……ここにわが高師が東海中部日本に呱々の声をあげたのである。同時に本校の予定地

岡崎市明大寺町栗林地内（通称芦池橋）の市立工業学校の校門に市立工業学校、市立商業学校の門札と肩をならべて岡崎高等師範学校の新しい看板が掲げられた。四月一日の官報に、初代校長として水野敏雄、教授松原益太、関野豊三、並びに筆者の四名が発令され、……四人打ち揃って、われわれの校舎に当てられている市立工業学校を訪れたが、校庭には八重桜が所狭しと咲きみだれ、うらゝかな春の光りに映えて、ちらりほらり散り初めていた。一、二年度までは生徒の収容は出来ても、やがて手狭まになるこじんまりとした校舎である。栗林山林の小高い丘に、新装をこらした白亜の殿堂がそびえ立つ日を夢見て、新らしい希望に胸の高鳴るをおぼえた。

（七里公章「創立を回顧して」『岡崎高等師範学校誌』）

◆岡崎高師の特質

ここで、改めて「岡崎高等師範学校設置要項」をもとに、戦時体制下に創設された岡崎高師の特質を整理しておきたいと思います。

第一に、岡崎高師には設置された学科は理科のみで、前年度に創設された金沢高師と同じく、文科は設けられませんでした。もっとも、岡崎市自体が理科のみの設置を掲げて高師誘致を行ったという経緯からすれば、当然の結果であるといえます。その一方で、理科のみの高等師

範学校であることは、金沢高師とともに、岡崎高師が紛れもなく戦時体制下の国策に合致させることによって創設が実現した事例であることを示しているといえるでしょう。

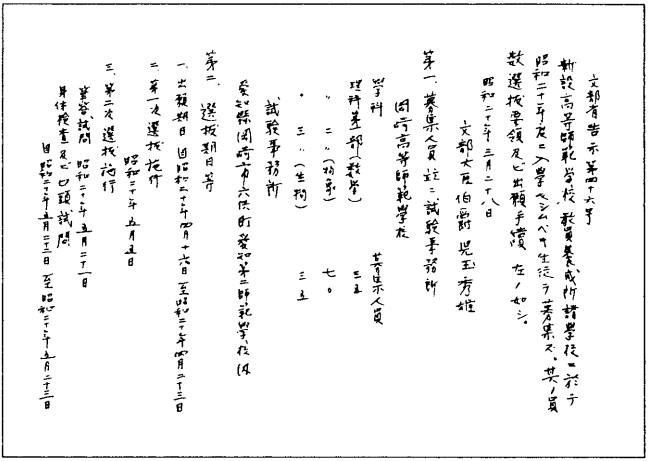
第二に、岡崎高師では、正規の附属学校が認められず「当分ノ内代用附属学校」が置かれることとされ、また、校地・校舎についても市立工業学校のものをそのまま利用することとされました。さらに、教授用の設備については、四ヵ年かけて徐々に整備されるというものでした。

こうした点から考えると、岡崎高師の設置内容は、「戦時体制下における教育費の切り詰めを反映して、国策に対応した、しかも、もっとも安上がりな道が選択された」（『名古屋大学五十年史』通史一）ことの結果であるといわざるを得ないのかもしれません。

◆創設当初のスタッフ

「岡崎高等師範学校設置要項」とともに国立公文書館に保管されている資料に、岡崎高師の教官配当を示す表と毎週教授時数・所要教官数を示す表があります。これらの資料によると、創設初年度には教授一三名、助教授四名、助手一名の計一八名の教官が置かれることになっています。

しかし、先に紹介した七里の回想にあるように、四月一日付けで着任した教官は水野敏雄校長のほか、松原益太・関野豊三・七里公章の三教授のみでした。その後、五月初めまでに渡辺


文部省告示第四十六号
新設高等師範学校、教員養成所、講習科ニ於テ
昭和二十年度ニ入学ベシムベキ生徒ヲ募集ス、其ノ員
数選抜要領及ビ出願手続左ノ如シ、
昭和二十年三月二十八日
文部大臣 伯爵 児玉秀雄
第一、募集人員 並ニ試験事務所
岡崎高等師範学校
学科 募集人員
理科第一部（数学） 三五
〃 二〃（物理） 七〇
〃 三〃（生物） 三五
試験事務所
愛知県岡崎市六供町愛知第二師範学校内
第二、選抜期日等
一、出願期日 自昭和二十年四月十六日 至昭和二十年四月二十三日
二、第一次選抜 施行
昭和二十年五月五日
三、第二次選抜 施行
実技試験 昭和二十年五月二十一日
身体検査及ビ口頭試問
自昭和二十年五月二十二日 至昭和二十年五月二十三日

第１回入試要項―物理科１回生の牛山氏が筆写したもの
（『岡崎高等師範学校五十年誌』より）

実・浅井浅一の教官二名が着任して、次第に教授陣も充実してきましたが、先の資料にある教官定員を満たすまでには至りませんでした。

◆入学者募集の準備

岡崎高師の第一回入学者募集に関する準備は、同校創設以前の一九四五年二月下旬ごろから始められました。その頃、愛知県第二師範学校（岡崎市六供町）内に設けられた岡崎高等師範学校設立事務所で準備が行われたのでした。七里公章の回想によると、設立事務所とはいっても机一脚と火鉢一個がある程度の部屋で、しかも、戦時下の物資不足のため入試要項の印刷さえ十分に行えなかったことがわかります。

……戦争末期、極度に物資不足の時でも

あって、募集要綱の用紙すら入手容易でない。印刷所も表口からはたのめない。最初五〇〇〇枚を印刷に附したが、要綱送れの申込みは次ぎから次ぎに殺到、次に三〇〇〇枚、計八〇〇〇枚、なお足らぬ、遂に印刷屋にも油が切れて断られる。小林老人（引用者注―募集事務の担当者）には甚だ御苦労であったがあと数千枚はガリバンでプリントしてもらうと言う始末。第一回入学者の中にはガリバンの要綱をもらった記憶があるだろう。

（七里公章「創立を回顧して」『岡崎高等師範学校誌』）

なお、受験希望者の中には、入試要項を入手することができないため、岡崎市の試験事務所に出向いて同所に掲示してあった要項を筆写した者もいたようです。

◆第一回入学試験

岡崎高師への入学志願者は全国各地から殺到し、入学定員一四〇名に対して三二一四名もの出願がありました（**表3**参照）。競争倍率がおよそ二三倍ですから、この数字からも岡崎高師の人気が非常に高かったことが理解できると思います。

第一回入学試験では、第一次選抜として内申書による査定が行われ、その結果二九九名が第二次選抜に挑むことになりました。そして、第二次選抜は、口頭試問・筆記試験・身体検査が

表3　岡崎高師第一回入学試験志願者数等（1945年度）

学　　科	志願者（人）	入学定員（人）	倍　率
理科第一部（数学）	1,007	35	28.77
理科第二部（物象）	1,205	70	17.21
理科第三部（生物）	1,002	35	28.63
計	3,214	140	22.96

（『岡崎高等師範学校誌』より作成）

五月一三日から三日間にわたって実施されています。

第二次選抜の結果は、五月一五日に発表されました。ただし、入学許可を得た者の数については、戦災で資料が失われたため正確にはわかりませんが、七里の回想によると「定員より多少上回った」とされ、また別の資料では約一五〇名との記述もみられます。なお、入学者の出身地は、全国三四都府県に及んだとされています。

◆入学式直前の空襲

第一回入学試験の合格発表からちょうど一週間後にあたる一九四五年五月二二日、「戦時教育令」（勅令三二〇号）が公布されました。この勅令によって、すべての学徒は、「食糧増産、軍需生産、防空防衛、重要研究等戦時ニ緊切ナル要務」に総動員されることになり、そのため「学校毎ニ教職員及学徒ヲ以テ学徒隊ヲ組織スル」ことなどが定められました。

その結果、入学試験に合格したばかりの全生徒は、入学式を行

う以前の同年六月一三日に学徒隊を編成しています。そして、七月二日には第一回生が学校に集まり、自宅通学生以外の生徒には校内の教室が臨時の宿舎として用意されました。岡崎高師教授であった関野豊三は、その当時の生徒の生活について、次のように回想しています。

生徒の日課は教室及寮の設営・講話・座談・食糧の運搬・炊事の手伝など全く戦時的日課であったが、空腹と疲労とで張りの足らない顔色は見るものをして可なり不安を感じせしめた。……街の映画場は殆んど閉ざされ読むものはないし、昼間の作業的日課を終えてもその夜を癒すべきたのしみもなかった。

（関野豊三「草創二年間」『岡崎高等師範学校誌』）

七月二〇日、午前零時過ぎから数時間、岡崎市は米軍による空襲を受けました。幸いなことに、動員準備のため生徒の大半が帰省していたこともあって岡崎高師関係者が命を失うことはありませんでした。しかし、爆弾三〇〇発余といわれる空襲によって、校舎のほとんどは焼失してしまったのです。豊野は、その時のようすを次のように回顧しています。

暁の白む頃二十三名の生徒と未だ濛々たる火煙の跡に立った。入学式もなく正式に発足

しない中に、跡方なくやけたのである。僅かに丘の下近くの便所の一角と渡り廊下が残ったのみであった。あれほど校舎を覆っていた樹々は幹を残したまゝ丸坊主でくすぶっていた。

（関野豊三「草創二年間」『岡崎高等師範学校誌』）

一夜にして校舎を失った岡崎高師では、入学式を控えて、新たな校舎を早急に探さなければなりませんでした。その後、七月二三日には岡崎市内の六名国民学校の一室を借り受けて、とりあえず仮事務所が設けられました。また同時に、仮校舎を三菱重工業針崎工場青年学校に、生徒宿舎を市内針崎町の勝鬘寺内にそれぞれ移転することが決まりました。

◆入学直後の終戦

岡崎高師の第一回入学式は、一九四五年七月三〇日に行われました。入学式は、生徒の動員先となる西加茂郡の豊田自動車挙母工場青年学校の教室で行われました。関野は、入学式のようすをこのように回想しています。

学校長の式辞の最中、すぐ近くの飛行場に幾度も爆弾が落され、その都度式辞の声は

きゝとれなかった。屋根をかすめて飛び去る飛行機に幾度も魂を冷したが学校長は教育の重要性とその使命について悠然として極めて平静に的確に説かれるところがあった。

（関野豊三「草創二年間」『岡崎高等師範学校誌』）

入学式の三日後、八月二日には同工場において動員生徒の入所式が行われました。動員作業は同月四日から開始され、「理科の生徒としての学習内容と関係のある自動車の構造機能の講義を隔日に組んだ作業であった」（関野「草創二年間」）とされています。

動員作業と講義が交互に行われる中、八月一二日には簡素ながらも岡崎高師の開校式が行われました。しかし、その三日後（八月一五日）には、終戦の詔勅が出されて終戦を迎えたのでした。